

接続詞「故に」の読みは「かるがゆえに」

鈴木博

一 問題提起

理由をあらわすのに用いる「故に」という言葉は、現代文では「ゆえに」と読まれ、次の二つの場合に使われる。

A 文頭で接続詞として。この場合の意味は「……。したがって」と同様である。

B 文中で接続助詞的に。この場合は「……だから」というような意味である。

Aは前の文が「……。」で終わった後を受けて、次文が順接の接続詞の「故に」から始まる場合である。Bは文中にあつて、「……の故に」とか「……するが故に」とかのように、順接の助詞ふうに使われる場合である。

現代文ではAの場合の「故に」もBの場合の「故に」

も「ゆえに」と読まれ、他の読み方をされることはない。

しかし江戸中期以前は、接続詞の場合の漢字書き「故に」を「ゆえに」とは読まなかった。もし「ゆえに」と読んでいたのであれば、それを証する古文獻による裏付けが必要である。端的に言えば、仮名書きによる文頭の接続詞「ゆえに」(「え」の仮名が「ゑ」や「へ」で記されている場合も含む)の文証を当該文献あるいはそれを溯る古い文献から提示する必要がある。仮名書きでなく漢字に対する付訓、つまり振り仮名で読みを示している場合は、「故(に)」の傍訓の位置関係が微妙にからむことがあつて、「故ユエ(ニ)」のごとくであれば、漢字の右下の「ユエ(ニ)」は送り仮名と見なされ、接続詞「ゆえに」の例証にならないことは言うまでもないが、「ユエ(ニ)」の位置が、訓点資料や整版本およびそれ

らの翻刻本で、スペースの窮屈さから少し上に来ていると、送り仮名でなく傍訓(振り仮名)のように受け取られ、あたかも接続詞「ゆえに」の用例がその文献に存在するかのように判断されてしまうことがある。早合点せずに慎重に対処しなければならない。

さてAの場合、すなわち文頭の接続詞の場合の仮名書き「ゆえに」の用例は、明治期の文献にならば次のように見られる。

○早く 読ム 時 ニ ハ 四 ト 七 ト ヲ 聞
キ 違フル コト アリ、 五 ト 九 ト ヲ 聞
聞キ 違フル コト アリ。 ユエ ニ 金銭 ヲ
カヅフル ニ ハ 七十七銭 ヲ かな十なな銭
ト 読ミ、 九十九銭 ヲ きう十きう銭 ト 読
ム コト 多シ。(傍線稿者)

右の文章は、明治二十二年金港堂版の小学校国語教科書である新保磐次著『日本読本』都市用(滋賀大学図書館教育学部分館蔵)、巻四の三丁裏「マチガヒ ヲ フセグ。」に見えるものである(昭和六十一年明治書院刊『語源探求』中の拙稿「四の字嫌い」に所引。この拙稿は後、補訂を加えて平成十年清文堂刊の拙著『国語学叢考』に所収)。ちなみに言う、接続詞「ゆえに」は右に引くように文語体の文章

の中で用いられる傾向が強いが、これは接続詞「ゆえに」の誕生が漢文訓読脈とかかわる点の大きいことから
の帰結と思われる。

二 室町期の文献における文頭の接続詞

「故に」の読みは、「ゆえに」でなく
「かるがゆえに」である

室町時代の文献には、Bの場合ならば仮名書きの「……のゆえに」とか「……するがゆえに」とかはあっても、Aの場合には仮名書きの「ゆえに」は見つけられない。したがって拙著『周易抄の国語学的研究』(昭和四十七年刊)の研究篇三九二頁の次例、

○我ハ柔テ巽ノ卦ニイテ、シカモ我ハ柔順ナゾ。サウ
テ近レ君ニテ家道ヲ治メテイタホドニ、天下ヲ富ス
ゾ。故ニ吉ゾ(巻四の三十六丁表)

における傍線部の順接的接続詞「故ニ」を、底本の土井本以外の諸本も同様の漢字書きで、かつ仮名書きの接続詞「ユエニ」の用例が六冊本『周易抄』諸本中に一切なくて、読みの確かな根拠がないにもかかわらず、五六九頁の索引で躊躇しつつ「ユ」の部に入れたのは誤りであった。右の用例の「故ニ」は後に詳述するように、そし

て左の抄物における傍線部のように「カルガユエニ」と読むべきなのである。

○上行^{ラヘハ}下效^{オウカウ}トヨムヘキカ。上ノ行^{カウ}、下效^{オウカウ}トモヨム

ヘキカ。下タル者ハ上ニヒカレテ行クモノソ。故ニ^カ

上モ下モ皆暴虐ヲ本トスルソ（京大蔵、六冊写本『三略抄』、卷四の四十二丁表一裏）

右の文中の「行^{ラヘハ}」は「ヲコナヘバ」、「故ニ^カ」は「カルガユエニ」という読みを示しているのである（この『三略抄』の用例は「滋賀大國文」38号の拙稿に挙げている）。

私がこのミスに気づいたのは、昭和四十八年に『明応八年円秀写 日本諸神根源集』を句読点を施し翻刻していた時である。この稿（以下、 α という）は「滋賀大学教育学部紀要」23号に載せ（宮田正信博士と共著、後に拙著『室町時代語の研究』（昭和六十三年刊）に収めたが、その二〇七頁の註一七（本稿では註(i)）で、次掲の山田孝雄博士著『漢文の訓読によりて伝へられたる語法』——山田博士は関係する本居宣長の『玉あられ』の説を引用——に触れ、註二〇（本稿では註(ii)）でも他からの資料を援用した。さらに同紀要33号（昭和五十八年）の『太平記』に関する拙稿（以下、 β という）でも述べ、岩波文庫の『続お伽草子』からも引例して、同様に前記の

拙著に収めた。

今拙稿の α から、文頭の漢字書き「故ニ」の見られる箇所を抜き出すと左の三箇所であつて（うち二例は文中の接続助詞の可能性もあるが）、

〔i〕此神ハ武勇ヲ好ミ玉フ。故ニ鎌ヲ柱ニ打テ……

〔ii〕……葦原ニ降臨シ、百王ノ元祖ト成リ玉フ。故ニ

此神ヲ為^レ本也。

〔iii〕天子ニ無^レ父母ニ云事ハ、天子得^レ位^ト、其親還テ劣

也。故ニ云爾也。

これらに対するそれぞれの註は左のとおりである。

(i)原文には句読点がないので、「故ニ」は接続詞とも接続助詞とも解される。山田孝雄博士の『漢文の訓読によりて伝へられたる語法』二六一頁に、接続詞「ゆゑに」の発生が江戸中期以降のように述べられている。後註(iii)に説くように、この書の中に接続詞「故ニ」の用例と認めるべきものがあるので、ここも接続詞「かるがゆゑに」と、接続助詞「ゆゑに」との両様の読みが可能であろう。

(ii)註(i)に同じ。

(iii)原文「……劣也故ニ」は、「也」で前文が終止していると見られる。そうだとすると「故ニ」は接続詞

と考えるべきであろう。「故二」をどう読むかについては、本書成立の寛正五年（一四六四）ないし転写の明応八年（一四九九）のころには接続詞「ゆゑに」の確例がない。『文明本節用集』を見るに接続詞「故」の用例はあるけれども、接続詞「ゆゑに」の確例を発見することは不可能であつて、また『ロドリゲス日本大文典』の接続詞の条にも、Caruga yuyeni（かるがゆゑに）はあるけれども、Yuyeni（ゆゑに）はない（土井忠生先生訳書三〇〇頁）。よつて接続詞「故二」の読み方は「かるがゆゑに」と考へる。接続詞「かるが故に」の用例は岩波文庫『続お伽草子』（室町時代語の研究）一七頁所引。本稿次掲）等に見られる。

さらに拙稿βから左に引く（具体的な『太平記』の用例二十の表示は省略）。

○……わたくしは仮名書きの接続詞「ゆゑに」の証例が示されなければ……中世では文頭の接続詞「故に」は、「ゆゑに」ではなく「かるがゆゑに」と読むのがよいと考へる。ところで日本古典文学大系本の『太平記』には、たとえば岩波文庫『続お伽草子』八五頁の、

◎これたゞ時の関白世のまつり事義に当らざる所より出づるなり。かるが故に天道よりとがめ給ふところぞや（さ、やき竹）

のような傍線部表記「かるが故に」は見られず、漢字の「肆」に対して「カルガユエニ」とルビを振るものが三例あるほかは、十七例が「故（二）」で、その中の二例の「故」にルビ「ユエニ」がある。けれども、それらの「故」とある所を元和八年の付調整版本で見ると、「故」とあつて大系本の「ユエニ」というルビ、読み方は古いものの伝承ではなさそうである。大系本ではルビのない接続詞「故二」も「ユエニ」と読まれる惧れがあるけれども、これらの諸例を仮名書き古写本の築田本（古態本系）・土井本（流布本系）によつて検すると、多くは「かるかゆへに」とあり、中には「連体形十ゆへに」とあつたりして、これらの古写本で見える限り文頭の接続詞「ゆゑに」の仮名書きはない。

三 山田孝雄博士説・本居宣長『玉あれ』の説

接続詞「ゆゑに」の誕生の遅いことを説いた前掲の山

田博士著『漢文の訓読によりて伝へられたる語法』(昭和十年刊)の「ゆゑに・ゆゑん」の条(二五八頁以下)から必要と考えられる部分を引こう。なお山田博士の文法用語には「接続詞」はなく、それに該当するものは「接続副詞」である。左引中の『玉あられ』は寛政四年(一七九二)版の四十七丁裏、およびそれを翻刻した筑摩書房の『本居宣長全集』第五卷五二二頁の「ゆゑに」の条とほぼ等しい(山田博士の誤脱二字等を稿者が補正する)。

○現代の普通文に接続副詞と名づくべき形式の語として「ゆゑに」といふ語を用ゐること屢々見ゆ。これも亦、国語本来の用法にあらざして漢文の訓読より馴致せられたるものなりとす。

これにつきて「玉あられ」に論あり。曰はく、
◎ゆゑにも、よりてと同じさまにて、もし上を切りておこしていふときは、このゆゑにとも、さるゆゑにともいふべし。詞のかしらにただに、ゆゑにとはいふべきにあらず。《稿者注。右の「よりて」についても山田博士のこの書二七頁に「ゆゑに」と同様の視点に立つ『玉あられ』からの引用がある》
といひ、なほ論じていはく、

◎古文にては、語のかしらにては、かれといひて、

故字を書り。又漢文に、句のかしらにある故字は、昔より、かるがゆゑにと、訓来れり。これ、かるがゆゑに、といふこと也。かやうによめるも、語のかしらにたゞに、ゆゑにとはいふまじきがゆゑ也。昔は漢文をよむにも、かく詞のつかひざまを正して、今のごとみだりにはあらざりき。とあり。

さてかく「ゆゑに」といふ語を用ゐたる例を見るに《稿者注。以下ルビなしの接続詞「故に」の用例三を挙げるが、一例のみ掲げる》、

◎故に同時代の多くの俗文家を目して小説家といふを得べくんば、西鶴が好小説家たりし事は誰も異論なかるべし(露伴)

の如く、まさに接続副詞の用をなせるものなりとす。按ずるに、かゝる語遣はこれ亦漢文中の「故」字のよみ方より起れるものなるべきが、その「故」字には多くの意義と用法とあるうち、かく用ゐらるるは「承上之辞」(助字弁略)又は「接続虚字」(虚字註釈備考)などいへるものにあたるべきなり。今それらの用例を見るに《稿者注。以下十五文のうち一文を示す》、

◎不_二自見_一故明、不_二自是_一故彰、不_二自伐_一故有_レ功
(老子、上)

さてこれらの「故」といふ語は漢文にては上文の意義を総括して下文を起す接続詞たるものにして、それは委しくいはば「是故」といふべきものなり。これは助語辭に「是故發語更_レ端之辭。亦是其說有_レ所_レ因而發。謂因_二此故_一」といひ、助字弁略に「猶_レ云_二是以是故_一」と説明せるものなり。「是故」の用例は《稿者注》。以下六例のうち一例を示す、

◎其言不_レ讓_二是故晒_レ之_一(論語、先進)

上例の「故」は上述の如く「是故」といふに同じ意なるを以て、古来「カルガユエニ」とよみ来れること「玉あられ」の言の如し。さてかくの如きをば古来必ず「カルガユエニ」とよみ来れるをばその語冗長なりとしてただ「ユエニ」とよみはじめしことは何時頃かといふに、さまで古き時代のことにあらざるなり。日尾荆山の訓点復古(天保年間《稿者注》。六年「一八三五」の著)にいはいはく、

◎故_{ユエニ}カ_ガ ヲ_{ユエニ} ヲ_{ユエニ} 当時ノ素読生タチヲ見ルニ、是ヲモ上ヲ削テ惟ユエニトバカリ読シムル者多シ。亦文盲ノ業也。

といひたるが、「玉あられ」に既に之を論ずれば、その時この事行はれたりしを見るべし。太宰春台の倭読要領《稿者注》。享保十三年(一七二八)版。巻中の四十八丁表)にいへらく、

◎(上略)コレヲ熟読トイフ。是讀書ノ要法ナリ。此法ヲ用ントスルニハ、殊ニ古来ノ読ノ如クナルムツカシキ倭訓、ムツカシキテニヲハラ除去テ、簡易ナラン様ヲ学ブベキナリ。

これらの説が、漢文訓読界を風靡して「ゆゑに」などいふ変則の語法を發生せしめしものなるが、その当初は漢文に習熟せしめむと欲するにありしこと明かなり。然れども漢文に忠実ならむとして国語に害毒を及ぼすことの如何を顧みざりしが故に、その余弊は時を経ずして国語の間に上の如き変則を生じ、終に普通文にまでその害毒を流すに至りしものなり。而して彼等漢学者をして今日に生れ出でて、かくの如き害毒を流したりしことを見聞せしめば、果して己が目的を達し得たりと慶ぶべきか、將た、その意想外の結果を見て驚き嘆くべきか。

以上、要するに古文における接続詞の漢字書き「故に」をどう読むかについては、本居宣長の「玉あられ」、

山田孝雄博士の『漢文の訓読によりて伝へられたる語法』の、右に引用した部分を見ずに、安易に現代文と同様に「ゆえに」と読むことは慎まねばならないのである。宣長は古文においては接続詞「故」は「かれ」と読み、漢文の句頭の「故」は「かるがゆえに」と訓読して来ていると述べており、また山田博士引用の日尾荆山の「訓点復古」にも、「カルガユエニ」と訓読すべき「故」字のよみを上略して「ユエニ」とだけ読む風潮を慨嘆している。これらによって推測すれば、接続詞「ゆえに」が「かるがゆえに」の上略形として誦せられるようになったのは江戸後期頃からであろう。

四 接続詞「かれ」の用例

古くは「かるがゆえに」と同義の接続詞として「かれ（に）」が用いられていた。その用例を日本古典文学大系に所収の『万葉集』『古事記』『日本書紀』の訓読文から左に掲げる。

- ①……生は食る可く、死は畏るべしと。天地の大徳を生と曰ふ。故に死にたる人は生ける鼠に及かず。
 （『万葉集』二一一頁。巻五「沈痾自哀の文」）
- ②……天の沼矛を賜ひて、言依さし賜ひき。故、二柱

の神、天の浮橋に立たして、其の沼矛を指し下ろして画きたまへば……（『古事記』上巻、五三頁）

- ③……精妙なるが合へるは搏り易く、重く濁れるが凝りたるは竭り難し。故、天先づ成りて地後に定る。然して後に、神聖、其の中に生れます。故、曰はく……（『日本書紀』上巻一、「神代上」、七六頁）

①の頭注に原漢文中の「故」字を「カレニ」と読むことについての説明があるが、ほぼ同様の内容が後掲の辞書中の語源的説明に見えるので、ここでは引用を省く。②③共に文中の「故」の読みが原文自体には示されていないけれども、平安初期の訓点資料に「故」の読み「カレ」が存するので、このように奈良時代の文献中の接続詞「故」を「かれ」と読んでいたのである。

なおこのような「故」を「かれ」と訓読することは後世へ伝統的に受けつがれて来ているようであって、室町時代に『日本書紀』を講述した清原宣賢の『日本書紀抄』（天理図書館善本叢書）中の、原文訓読の振り仮名に「故」（接続詞）とある。前掲③とは漢字、読みの異なるところもあるが、それはそれとして③に相当する箇所を左に示そう（ヲコト点を平仮名書きして括弧に入れる）。

- 精妙之合搏易、重濁之凝場

難^{タシ}。故^カ、天^{アマ}先^{マツリ}成^リ而^{シテ}、地^{ツチ}後^ニ定^ム。……故^カ曰^{ハク}……

(一八三・一八五頁)

さて平安初期の漢文訓読資料において「故」字を「カレ」と読む証例は、春日政治博士著『西大寺本金光明最勝王経古点の国語学的研究 研究篇』に次のように見える。

○故^カ字は又カレと訓む場合もある。

○第三味に依^リて、故^カレ「於」樂と説ク。「於」

大智に依りて、故^カレ清浄と説ク。

○他に証知セ令^メむとして、故^カレ種種の世俗の名言を説かクのみ。

このカレは古典の訓方では上の文の終結を承けて、下の文の頭に立つ故^カ字に当てられてゐるのが普通であるが、この古点に於けるこの語は皆上の文が接続形を取つてゐる下に入れるのである。これらは「依ルガ故ニ」「令メムトスルガ故ニ」を以て代へ得る所であるが、一種特異な用法であつて、接続代名詞の用法に準ずべきものである。(一八四頁)

右に引例の「故^カレ」三例は文頭の接続詞とは異なるけれども、春日博士はそれに準ずるものと見ておられるかと思ふ。

大矢透博士の『仮名遣及仮名字体沿革史料』を見ると、傍訓の「故^カ」が次の資料に存する。

○法華義疏(長保四年(一〇〇二) 石山寺蔵)

○大毗盧遮那成仏経(天喜六年(一〇五八) 高野山竜光院蔵)

○妙法蓮華経女賛(保安三年(一一二二) 法隆寺蔵)

ついでに「カルガユエ」の証例も大矢博士の同書から左に示そう。

○肆^{カルガユエ}(豊宮埼文庫蔵『古文尚書』、正和三年(一一三二)四)。

これは「傍訓」欄でなく「仮名遣」欄に見える)

五 文頭の接続詞「ゆゑに」発生の筋道

文頭の接続詞「ゆゑに」発生の筋道についての本居宣長および山田孝雄博士の考えは前掲のとおりであつて稿者も全くこれに同感するが、同義の接続詞「かれ」「かゝるがゆゑに」の語源的説明を『岩波古語辞典』で見るととする(この辞書には文頭の接続詞「ゆゑに」は立項されていない)。

○カ(彼)と有りの已然形アレとの複合したカアレの約。奈良時代以前には、已然形だけで既定の条件を示す語法があつたので、カアレだけで、カアレバの

意を表わした。漢文訓読で使う語。

○カ(斯)アルガユエ(故)ニの約。

右の説明中の「カ」(彼・斯)は、終結した前文の内容を指し示している言葉であつて、これが後文の冒頭に置かれることによつて、「カアレ↓カレ」「カアルガユエニ↓カルガユエニ」が文頭の接続詞として成立して来ていると考えられ、先掲の宣長・山田論にも添つていて、きわめてスムーズに納得できる。

これに対して『日本国語大辞典』における接続詞「ゆえに」の語源的説明は左のとおりである。

○名詞「ゆえ(故)」に助詞「に」の付いてできたもの。

この辞書が文頭の接続詞「ゆえに」の文証として引く古文からの諸用例については後に検討を加えるが、右のような語源的説明からは、接続詞「ゆえに」が「こういうわけで」「そのために」という意味で後文の文頭に用いられる際の「こういう」「その」に当たるものが生まれ来ない。名詞の「ゆえ」の前に「かくあるが(ゆえに)」「しかある(ゆえに)」「この(ゆえに)」等があつて、はじめて終結している前文を受ける、後文冒頭の接続詞としての意味・機能が充分に備わると思う。先に述べた

ことの繰返しになるが、「かくあるがゆえに↓かかるがゆえに」「しかあるゆえに↓しかるゆえに」と文頭に用いられ、「かかるがゆえに」「しかるゆえに」の仮名書き例は実在する、その「かかるがゆえに」が後に上部の「かかるが」を省いて接続詞「ゆえに」を出現させたと考えると、筋が通ると思うのである。

右に述べたような、本来の長い一続きの接続語句を上略(時には下略)して短くした接続詞の例が、大槻文彦博士の『口語法別記』の接続詞の条の「語句を略して接続詞に用いるもの」の中に順接例、逆接例の両方共に左のように見える(三〇六頁)。ここに「かかるがゆえに↓ゆえに」が採り上げられていないのは、現代文において接続詞「ゆえに」が用いられる時は文語口調の場合であつて、口語文法を説くこのような書に接続詞「ゆえに」の取り上げられないのは当然だからであろう。

- ①人が集まつた、(そう)して、演説が始まつた。
- ②品が出来あがつた、(それ)で、人に見せた。
- ③空が晴れる、(そう)すると、風が吹く。
- ④しくじつたらう、(それ)だから、よせと言つたのに。

⑤雨が晴れた、(晴れた)が、まだ雲が収まらぬ。

⑥ 智恵わある、(そう) だけれども、学問わない。

⑦ たいそう力がある、(それ) でも、角力取にわたれまい。

⑧ 敵軍を破る、(それ) のみならず、其大将まで生捕つた。

⑨ 春になつた、しかし(ながら)、まだ氣候わ寒い。

これらの例、特に「そうして↓して」「それで↓で」「そうすると↓すると」「それだから↓だから」等の簡略化した接続詞の派生は、「かるがゆゑに↓ゆゑに」という成立の経緯の説明の有力な支証となるであろう。

六 古文において文頭の接続詞

「ゆゑに」とされているものの検証

宣長の説に気づかず、あるいは等閑視して、現代語的感覚で古くから文頭の接続詞「ゆゑに」があつたとする前提に立つ諸文献の読まれ方に関して、以下に検証しよう。

十世紀初めに撰進された『古今和歌集』には仮名序と真名序とがあるが、その真名序の中に「故」字が文頭に左のように使われている(いま句点、返り点を施す)。

○……至_レ有_レ好色之家。以_レ此_レ為_二花鳥之使_一。乞_二食_一之客。

以_レ此_レ為_二活計_一之謀。故_上半_レ為_二婦人之右_一。難_レ進_二大夫之

右を新日本古典文学大系本では次のように訓読する(三四三・三四五頁)。

○好色の家、此を以ちて花鳥の使と為し、乞食の客、此を以ちて活計の謀と為すこと有るに至る。故に半ば婦人の右と為り、大夫の前に進むこと難し。

すなわち右では原漢文の文頭の「故」字を接続詞として「ゆゑに」と読んでいるのであるが、そのように読む根拠は脚注に示されていない。もし文頭の接続詞「故」を「ゆゑに」と読むのであれば、そのような接続詞「ゆゑに」の仮名書きを当時、ないしそれ以前の文献から例証として示す必要がある。もし仮名書きの用例が見つからなければ、送り仮名でなく振り仮名であることの確実な文頭の接続詞「故」の付訓例を示す必要がある。先述来の理由によつて、文頭の接続詞「ゆゑに」は『古今集』の頃にはまだ発生していなかつたと思われ、この真名序の中の「故」は「かれ」と読むのが最もよからうと考えられる(「かれ」以外の読みでは「かるがゆゑに」が候補にのぼるであろう)。

『日本国語大辞典』の接続詞「ゆえに」の条には諸文献からの用例が挙がっているが、二葉亭四迷の『浮雲』を除く古い文献は次の五つである（括弧内は底本）。(2)（5）における用例はどれも漢字書きの「故に」であつて、これを「ゆえに」と読む確たる内部根拠（つまり各文献内に仮名書きの「ゆえに」の存する文証）はなく、むしろ文献によっては「かるがゆえに」と読むべき強い可能性が存する。問題は(1)への対処の仕方であるが、既掲のようにこの資料には「故」が存在するので、もし接続詞「ゆえに」の存在も認められるとするならば、「かれ」と「ゆえに」とが同一資料に全く同義の接続詞として共存することになる。これは甚だ珍奇な現象と言うべきであらう。

- (1) 法華義疏長保四年点——二（古点本の国語学的研究）
 - (2) 百座法談聞書抄——三月二日（佐藤亮雄編）
 - (3) 愚管抄——一・清寧（日本古典文学大系）
 - (4) 中華若木詩抄——中（抄物大系）
 - (5) 春雨物語——海賊（日本古典文学大系）
- (1)の用例を中田祝夫博士著『改訂版 古点本の国語学的研究』の「訳文篇」四一九頁から引くと左のとおりである。

(1) 道の名と俗の性と十号と此の三の句は、人同（じ）と（いふこと）（を）明す。七善は是（れ）法同（じ）なり「也」。所「以」（黄補）（に）諸の事（き）同（じ）なり（と）いふこと（を）明す。者、同（じく）一極の「之」道に体（か）へり。

右では「者」字の右に片仮名で「ユヘニ」とあることになつてはいるが、四〇三頁のこの箇所影印では「者」字の右横の片仮名「ユヘニ」は確認不能である。今石山寺蔵の原本『法華義疏』に当たる余裕がないけれども、もしそういう付訓があつたとしても、その「ユヘニ」は振り仮名でなく送り仮名である可能性がある。そうだとすれば「者」のように見えているものは「者ユヘニ」と判断され「カルガユヘニ」と読むことができることになる。なお中田博士のこの本の「総論篇」九二八頁の「第二部——平安初期の訓点本の国語学的解説に関するもの」中の「(五) 高山寺所蔵 弥勒上生経賛古点について」において、左引のように文頭の接続詞「カレ」「ユエニ」に関して述べられ用例も示されている。

○故——文末としてはユエニと訓むが、文初に来て接続詞となる際にはカレまたはユエニと訓む。カレは前から続く時にも、一旦切れた文を受ける時にも、

用ゐる。

「法堂（イ）尊勝な（ル）（ヲモチテ）故レ願首（ヲ）
標（ス）」

「主（ヲ）（ハ）慈尊（ト）号（ス）。故レ能（ク）矜
（ミ）（ヲ） 苦厄（ニ）垂レタマフ」

しかし文頭の接統詞「ユエニ」の方の用例は全然示され
ていないので、本稿ではこれに関して筆を費やすことを
控える。

以上によって稿者は『日本国語大辞典』に引く①の用
例は、接統詞「ゆえに」の存在を証明するのに問題があ
ると考える。

②は底本の校註九〇頁（翻刻一七頁）に辞書所引の文
頭の接統詞の漢字書き「故に」があるけれども、仮名書
きの文頭の接統詞「ゆえに」が見つからないので、この
「故に」を「ゆえに」と読んでよいことにならない。む
しろ三月廿七日の条に仮名書きの接統詞「カルカユヘ
ニ」（翻刻四二頁。校註では一一六頁）が存するので、漢字
書きの文頭の接統詞「故ニ」は一六・四〇頁の用例も含
めてすべて「かるがゆえに」と読まれるべきであろう。
小林芳規博士編『法華百座聞書抄総索引』における索引
で、本文の接統詞「故ニ」を「ゆゑに」の項に収めてい

るのも「かるがゆゑに」の項にすべて移すのがよいであ
らうと思う。③の『愚管抄』の用例については底本の太
系本五四頁には辞書の引例同様に「故ニ」とあってルビ
がなく、他に文頭の接統詞の仮名書き「ユエニ」の用例
がない。ところが三六三頁の補注に引く『簾中抄』から
の同じ内容文には仮名書きで左のように「かるがゆへ
に」とある。

○此御門しらがおひてむまれ給へり。かるがゆへにし
らがとなづけたてまつる。

したがって『愚管抄』本文の方の同様文中の接統詞「故
ニ」の読みも、「ユエニ」ではなく「カルガユエニ」が
適切であろうと判断される。④の『中華若木詩抄』の用
例は、新日本古典文学大系本では一八五頁の抄文中に見
られるが、辞書所引と同様に左のごとく「故ニ」に振り
仮名がなく、これを「ユエニ」と読む決め手は存しない。

○世俗ノ窺イ知ルベキ処ニアラズ。故ニ、笑而不_レ答_ヘ
也。

⑤の『春雨物語』（著者の上田秋成は本居宣長と同時代人）
は底本の一六五頁に辞書所引の用例が見られるが、接統
詞「故に」に振り仮名がなく、稿者としては「かるがゆ
えに」と読むのがよからうと考える。

他の辞書では『新潮国語辞典』の接続詞「ゆえに」の条に『延慶本平家物語』からの引例があるが、吉沢義則博士校註本によれば、

○……五人の仙人の舞事各異節也、故に此を五節と名付たり、(一一頁)

とあって、傍線部の漢字書き「故に」には読み仮名が付されていず、文頭の接続詞「ゆえに」の確例とは見なし得ずして「かるがゆえに」と読むべきものと見得るのである。

昭和四十五年十月号「月刊文法」の「接続詞小辞典」中の堀内武雄氏稿「ゆゑに」(文語。六四頁)に仮名書きの例を、先掲の『古今集』真名序のほかに、日蓮の『佐渡御書』からも左のように示す。

○世間の浅き事には身命を失へども、大事の仏法なんどには捨つること難し。ゆゑに仏になる人もなかるべし。

しかし右の傍線部の仮名書き「ゆゑに」は日本古典文学大系『日蓮集』四二九頁でも岩波文庫『日蓮文集』三二二頁でも漢字書きの「故に」であって、この用例は『古今集』真名序の例と共に、文頭の接続詞「ゆえに」の存在を証することにはならない。

七 「かるがゆえに」の用例

仮名書きの接続詞「かるがゆえに」の用例を以下に若干示す。『岩波古語辞典』には『地藏十輪経序』『大鏡』『御伽草子』からの三例が挙がっているが、その中の『大鏡』の用例は『日本国語大辞典』や『新明解古語辞典』にも引かれている。それは日本古典文学大系本六五頁の左文である。

○このおとゞは内膳のおとゞの三郎。……大臣の位にて六年。田邑の御おほちにおはします。かるがゆへに、嘉祥三年庚午七月十七日、贈太政大臣になり給へり。

ほかに日本古典文学大系の索引から検索すれば次の二例がある。

○蓬萊宮と申(す)とも、いかでこれにはまさるべき。かるが故ゆへに名づけて、歩みをはこぶともがらは、諸願かならず満足せり。(『御伽草子』三〇八頁。「浜出草紙」。岩波文庫本では下二二六頁)

○父母の恩より師の恩は深いという。かるがゆえに、「弟子七尺去って師の影を踏まず」と古人も言うておかれた。(『狂言集下』二八八頁。「重喜」)

なお狂言については次掲のそれぞれの索引によると、文頭の接続詞「ゆえに」は皆無であるが、接続詞「かるがゆえに」は池田広司・北原保雄両氏著『大蔵本 狂言集の研究』に二例あり（「けいりう」〔巖島〕、その中の一例は北原保雄・小林賢次両氏著『続狂言記の研究』にも同様に見られる〔鶏立の江〕）。

少し溯って仮名書きの古写本の『太平記』の一本を西端幸雄・志甫由紀恵両氏編『土井本太平記 本文及び語彙索引』で見ると、文頭の接続詞「ゆえに」はなく、「かるがゆえに」が二例ある。このような状態はキリシタン資料でも同様であって、日本古典全書『吉利支丹文学集下』（昭和三十五年朝日新聞社。新村出博士・柘源一氏校註）所収の国字本『どちりなきりしたん』（一六〇〇年長崎版）四六頁の、

○……そむく事あるべし。故に此三の善は……（序文）

の傍線部に対して、頭注で、

○ローマ字体「かるがゆえに」とあり。本書もさう読む。

と記し、以下同書一四七頁の文頭の接続詞「故に」についても同様の頭注を施している。右の頭注で「ローマ字

本云々」と言うのは橋本進吉博士の『文禄元年 吉利支丹教義の研究』（昭和三年東洋文庫）のローマ字序文二頁目の Carugayyeni およびその翻字の「かるが故に」を指している。また『キリシタン研究第七輯』（昭和三十七年。吉川弘文館）のバレット写本の翻字索引によれば、接続詞

「かるが故に」は六例あるが文頭の接続詞「ゆえに」は一例もない。さらに豊島正之氏作成のローマ字本の文脈つき語彙索引の『サントスの御作業』『ヒイデスの導師』『スピリツアル修行』でも、接続詞「カルガユエニ」は多数存するが接続詞の「ユエニ」はなく、その故に豊島氏は国字本の漢字表記の文頭の接続詞「故に」をすべて「カルガユエニ」と読んだ。これに関して氏は『タシシギヤドペ』かどる本文・索引Ⅰ（昭和六十二年清文堂）の「個別注」十五頁で、

○カルガユエニは文頭に、ユエニはそれ以外にのみ使われる。ユエニで文が始まる事は無い。これは、早く宣長が「玉あられ」（筑摩版全集五―五二）で指摘している。（というより、その少し前迄はこの規則が生きていたというべきか）。

と『玉あられ』に言及している。『玉あられ』の説は既掲のとおりであって、宣長は漢文訓読の際に文頭の接続

詞「故ニ」を、古来の読み「カルガユエニ」でなく「ユエニ」と読もうとする最近の風潮を慨嘆しているのである。一般に文語体の文章が書かれる時に文頭の接続詞を仮名書きで「ゆゑに」とするような例は、稿者としては容易には見つけ得られないでいる（明治期の用例は本稿の初めの方に挙げた）。

ともあれ、この見地に立つて室町末期の抄物『玉塵』の巻一・巻七の文脈つき総索引が出雲朝子・豊島正之両氏によって作成された時（平成二年）には、底本には接続詞としての「カルガユエニ」「ユエニ」の仮名書きがどちらもないのに、両氏は漢字書きの接続詞「故ニ」のすべてを「カルガユエニ」と読んだのである。

『時代別国語大辞典室町時代編』には「かるがゆゑに」の用例を、『易林本節用集』『日葡辞書』『春鑑抄』『光悦本謡』大会』『短編』金剛女の草子』から引き、『日本国語大辞典』は「かるがゆゑに」の用例を、『百座法談』『大鏡』（以上の二例は本稿で既述）『色葉字類抄』『天草本伊曾保』『日葡辞書』から引き、かつ古辞書の色葉・名義・和玉・文明・易林・書言に「カルガユエニ」の存在することを示している。

古辞書の類では既出のほか、元禄八年（初版は貞享

四年（一六八七）版のアクセント辞書『補忘記』の「加」(カ)の部に、

○故ヘニ (三〇丁裏。左側のアクセント記号は「低高高高ヘニ」を低低ヘニを示す)

と、送り仮名の「ヘニ」があり、「ユ」の部に「故ヘニ」なし、アクセント記号が合計六つ左側に示されている。

次に、これよりも時代は降るが文化七年（二八一〇）版のイロハ引きの日蘭対訳辞書『蘭語訳撰』（巻二の二十九丁裏）にも、接続詞の「ユエニ」はないけれども「故カルガユエ」（仮名の最終の「ニ」がないがスペース不足で印刷の際に欠落したか）が、オランダ語の Daarom（だから）の意）の対訳日本語として用いられている。

以上のような次第で接続詞「かるがゆゑに」の確例を挙げるのには困らないが、文頭の接続詞「ゆゑに」の古仮名書き例は見当たらないのである。

八 結び

以上に縷説したところによって、江戸中期以前の文献において文頭の接続詞「ゆゑに」の仮名書きは見つからず「かるがゆゑに」ならば見つけることが困難ではないので、古文献における文頭の漢字書き「故に」の読みは

「かるがゆえに」であつて「ゆえに」ではないことが諒解されるところ。そしてこの文頭の接続詞「故に」の意味が「こういうわけだから」であるので、「かるがゆえに」という読みならば「こういう」に当たる「かるが」があり、単なる「ゆえに」の場合には「ゆえ」の前に前文の内容を指し示すもの（「こういう」等を意味するもの）がないので、文頭の接続詞「ゆえに」の成立（発生）を名詞「ゆえ」プラス助詞「に」とする考え方は筋が通らず、そうではなくて「かるがゆえに」の上略形として

「ゆえに」が発生したと考えるのが妥当であり、したがつて文頭の接続詞「ゆえに」の誕生はほぼ宣長の頃かということになるであろう。かくして従来、文頭の漢字書きの「故に」を「ゆえに」と読んできた古文獻の用例については、それらのすべてを、「かるがゆえに」と読み改めるべきであろう——そしてそれらの各索引も「ユ」の部から「カ」の部へ移しかえるのがよからう——と思ふのである。

（大谷大学非常勤講師）